



天使より悪魔



kou

悪魔のぼやき

群青色に染まる空が一面に広がり、カイムは空を見上げた。見上げた途端に雨が降ってきた。人間たちは突然の雨粒襲来に逃げ惑っている。用意していた折りたたみ傘を広げる者もいれば、屋根の下で雨宿りしている者もいた。

やれやれ、人間というのはそそっかしい。

カイムは一仕事終わったばかりだ。世間では詐欺師と呼ばれる人間を裁いてきた。振り込め詐欺という昨今人間界で猛威をふるっている諸悪の根源を断ち切るべく、その者の魂を喰らう。悪の魂は不味い。悪魔の僕に言われたくはないだろうが、心が汚れ、傲慢な魂ほど不味いものはない。もちろん魂を抜かれれば、人間は、死ぬ。

携帯電話が鳴った。どうもこの周波数はカイムの耳に合わない。

「終わったかい？」

悪魔界三大派閥の一つ『デス』を統括するサザンが飄々とした口調で言った。そもそも悪魔界は空前の好景気に見舞われている。なぜなら悪事を働く人間どもが多いからだ。一般的に悪魔は人に災いをもたらすと云われているが、それはあくまで悪事や不正を行っているものにたいしてだ。名もなき善行を積んでいる人間に対して、魂を喰らってしまったら、カイムの身体は消滅してしまう。人間界で悪魔に対する文献を少し読ませてもらったが、くだらない。どれも嘘っぱちだ。たまに人間の方からもこちら側に、どういうルートか知らないが連絡がくるのに。

まずい、思考しすぎた。電話の相手は、待つ、のが嫌いだ。

「おい、きいてんのか」

早速、サザンの口調が変わる。

「きいてますよ。サザンさん」

カイムは努めて明るい口調に徹した。怒った相手にはできる限り朗らかに、天使時代に教えてもらった教訓、だ。

「ならいい。で、どうだった？すぐ終わったかい？」

サザンの口調が元に戻った。

「ええ、最初は僕が悪魔ってことを信じてもらえなかったんですが。対象の魂を出し入れして遊んでたら、だんだん信じてくれました」

「そりゃあ、普段は人間の姿をしてるから信じてもらえないだろうな」

サザンは鼻で笑った。鼻息が電話越しにカイムの耳に伝わってきた。

「そうしたら、『もう、悪さはしない。人を騙して金儲けなんかしない』って懇願されたんです」

「それは無理だっていったんだろう？」

「ええ」カイムは見えない相手にうなずき、「もう遅いですよ。そういうルールですから、って伝えておきました」淡々と言った。

「そのときにはもう死んでるだろ」

ハハハ、とサザンは高笑いをした。それはなにもかもがうまくいってる者特有の笑いだった。声がよく響く。

「ぐったりしたかと思ったら安らかに目を閉じたので問題ないかと」

カイムは自動販売機を探した。やけに喉が乾く。人間の姿とは不憫なものだ。一度にたくさんの栄養源を摂取しなければならない。だが、自動販売機はなく、雨は気づけばあがっていた。

悪魔に囁く女

カイムは仕事終わりの定番、というか自分へのご褒美のためにカフェでパンケーキを頼んだ。人間界で極上のスイーツといえばパンケーキだと、彼は自負する。パン生地上に丸いアイスが乗っている光景は闇が光に変わる瞬間を想起させる。アイスがやや溶けるのを待つのがカイムの哲学でもある。さらにはカフェでは珍しく個室なので、誰かに邪魔される必要はない。難点は駅近ということもありガラス張りの窓から踏切が見え、その音が絶え間なく彼の聴覚を刺激する。悪魔は人間に比べ聴覚が発達しているので過敏に音が体内に侵入してくる。その辺の事情を人間もわかってくれると居心地が良いのだが。

踏切の音とともに店員がパンケーキを運んできた。もちろんアイスはまだ溶けてなく、パンケーキの香ばしい匂いがカイムの鼻孔をかすめた。

「お客さん」

女性店員がカイムに話しかけた。

「なにか？」

カイムは訝しげな表情をし訊いた。目の前にごちそうがあるのに話しかけてくれるとはセンスのかけらもない。ここにもしサザンがいたならば、激高することこの上ない。

「あそこに少女がいるじゃないですか、ずっと」

店員の指差す方向をカイムは眺めた。たしかに中学生ぐらいの少女がいる。

「それがなにか？」

再度カイムは訊いた。

「あれは自殺の兆候ですよ。兆候。私もあのぐらいの年齢のときに、クラスでいじめられて、よく踏切の前に立ってましたもん」

店員は自分の過去をカミングアウトした。

「それに似ている、と」

「似てますね。背中からピンピン感じます」

そう言って店員は肩をピンピン上下させた。

「考えすぎじゃないかな」

カイムはパンケーキを見た。既にアイスは溶けていた。

「いえ、間違いありません。お客さん、様子見にいらしてくださいよ。私はまだ業務中ですし、それにお客さん、そういう仕事関係の方じゃないんですか？」

たまに人間界にもカイムの正体をズバリ言い当てるものがあるが、だからといってそれが的を得ているわけではない。人を救っているわけではなく、悪事を裁いているのだ。どうもこの変の認識がうまく浸透していないことに、カイムは憤りを感じる。

そう、だから少女は悪事は働いているわけでもなければ、自殺をすることも限らない。なのでカイムの出番はない。

が、「ほら、お客さん。少女が一步前に進んだ。間違いありませんよ。早く」店員は、カイムの腕をとり立ち上げらせ、行ってこい、と命令口調で踏切へ向けて再び指をさした。

いやいやながらも少女の背後にカイムは立った。さらに店の方を見る。業務中と言っておきながら店員がこちらを鷹のように鋭い目つきで見ている。

「少女よ」

カイムは声を掛けた。びくっと少女の肩が上がった。そして彼の方を振り向いた。それは中学生にしては大人びた顔立ちだった。成人すれば容姿端麗コースだろう。長い艶やかな黒髪。くりっとした目。タイトなTシャツにタイトなデニム姿だった。赤のスニーカーが愛らしい。

「ほっといて」

ツンとした表情をした。

「そこにいたら危ないぞ」

「大人には関係ないでしょ。大人が家族を崩壊させたんだから」

少女の言葉には陰が含まれている。どうやら一筋縄ではいかないし、なにかしら`大人、に対して恨みがあるらしい。

「よかったら話を聞かせてもらえないか。大人が崩壊させたなら大人が修復できることもあると思うんだ」

カイムはなぜか言葉がスラスラでた。やはり女に弱い。

「あなた、面白い言い回しするのね。大人のくせに」

少女は笑うと八重歯をのぞかせた。間違いなく、大人になったらモテる。

悪魔に女が独白する

私、死のうと思ったの、少女はカフェの個室で言った。なぜか女性店員も同席している。どうやら、少女の父親は不動産会社を経営しているのだが、昨今の不景気で業績は傾き、資金繰りに行き詰まった。それはよくある話だ。だが、その弱みにつけこんでくるものがいた。それが詐欺師だ。

「じゃあ、その詐欺師に騙されたから融資してもらえなかったの？」

少女は弱くうなずいた。

「本当、今みたいな高度な資本主義ってやんなるわ。お金を儲けるか、お金で解決するしか、この選択しかないじゃない」

女性店員は怒気を含んだ声で言った。その選択だけではない、とカイムは思うが普段悪事を裁いている身としてはあながち間違った指摘でもない。人間というのはつくづく強欲な生き物だ。欲の連鎖が止まらない。ひとつ味をしめると、また次、そして次と、欲の連鎖は続く。野心や欲というのは全くない、というのも考えものだが、適度な野心や欲が人を成長させる原動力だとも彼は思う。まあ、悪魔の俺に言われたくはないだろうが。「エリザベス・テイラーが`愛はお金で買えない、とか言ってたんだけど、既にその発言当時に彼女は大金持ちだったのよね。ふざんけんなよ。説得力ないんだよ」

女性店員は憤懣やる方ない感じで怒りを露にした。カイムはその人誰？と思ったが女優らしい。それにしてもこの店員はよく喋る。店員の名前はクリコで、少女の名前はフユカと古風で響きのよい名だった。

「で、お客さん。どうするの？乗りかかった舟でしょ。解決しなさいよ」

クリコは有無をいわせぬ口調で言った。

居心地の悪い空間から抜け出したかったカイムにとって願ってもいないタイミングで電話が鳴った。着信表示を確認するとサザンだった。席を外す際に、クリコが舌打ちをした。この状況下でよく席を外せるわね、と言わんばかりに。

「もしもし、カイムです」

「ああ、カイムちゃん。さっそく仕事の依頼が来たよ」

お決まりの軽い調子でサザンは言う。

「早いですね」とカイムは言い、「仕事があるのは嬉しいことです」と添えた。

「悪魔界は空前の好景気だからね。一人補充したから後で紹介するよ」とヒヒヒとサザンはこの世にはない笑いをした。「で、今回も詐欺師なんだけど、よろしく。名前は溝端タマキ。なにやら銀行と手を組んであくどい詐欺をやっているみたい。最近も、ある不動産会社を騙して倒産させたみたい」

不動産会社？フユカの父親も不動産会社を経営していたといっていた。そんなことがあるわけないか。いや、一応確認だけはしておくか。

「経営者の家族構成ってわかりますか？」

カイムは訊いた。

「なんでそんなの気になるかな。まあ、いいや。ちょっと待って」と何やら書類を捲る音がし、「妻と娘の三人暮らしだね。こりゃあ融資詐欺だね。家が競売にかけられてるよ。なんで人は金が絡むと理性を失うのかね」とサザンは言った。

「娘の名前を教えてくださいませんか？」

カイムの電話を握る手に力が込められた。

「さすが女好き。懲りないねえ。天使剥奪されたのに。ええと、ええと、娘はフユカという名前だね。ほお、写真が添付されているけど、若いのに大人びてるね。これはモテるよ」

そのフユカが扉一枚隔てた場所にいることをサザンは知らない。

やれやれ、これは偶然か必然か。関係ないと思っていたが、フユカとは何か見えない糸で繋がってるらしい。乗りかかった舟、か。仕事ならば乗るしかない。

「決行日は明日ね。その後、すぐ別の仕事があるから」

いつもより仕事のサイクルが早い。だいたい三日後に決行なのだが、それほど仕事の依頼、つまりは悪人が多いということだろう。

「わかりました。完了次第報告します」

「うん。よろしく。今回のクロージングは、口に口ウソクを一本啜えさせて、火を灯して。室内は暗くね。これ非常に重要。`室内は暗く！、よろしく」

サザンの電話は唐突もなく切れた。室内を暗くしてうまく写真が撮れるのか、カイムは心配になった。

決行日が明日となれば、うかうかしてられない。早めにターゲットに接触しなければならない。ついでに騙されたお金を取り戻してあげるか、彼はそんなことを思い彼女たちがいる扉を開けた。

「遅いぞお客！」

カイクが扉を開けるなりクリコは言った。
「その話に乗ろう。そして金を取り返す」
その勢いに負けじとカイクは快活に言う。
「どうやって？」
フユカは訊いた。
「まあ、任せてください」
カイクはフユカの頭をポンと叩いた。
「家も、このままじゃなくなるんです。それに家族はバラバラです。いつも父と母は喧嘩をしています。あんなに仲が良かったのに」
フミカは目元から涙をこぼした。真珠の涙を。君は強くなる、カイクはなんだかそんな気がした。

悪魔は見届ける

カイムは翌日、サザンの指示通りに銀行前で待ち伏せをした。大手都市銀行。でかでかと己を誇示するかのよう看板が掛けられている。人の往来もどこか忙しい。

サザンの指示では十四時三十分に銀行から出てくるところを捕獲、悪魔界が用意したマンション一室へ移動。という手はずである。それらの行動をカイムは人に見られても構わない。後日、姿形を変え、今の風貌はなかったことになる。今回は上等なスーツを着込み、黒縁眼鏡を掛けている。どこからどう見ても有能なビジネスマンで通る。

携帯を取り出し、送られてきたタマキの画像を確認した。それと同時にそっくりな男が自動扉から出てきた。カイムはタマキの肩に手を振れ、気絶させる。貸したくもない肩を貸し、用意してあったベンツに乗せる。得意に周囲は気にするでもなく、あっさりとは事は運んだ。人間というのは、なんだかんだ言って自分のことしか興味はないのだ。見ているようで見ていない。

マンションの一室には、ベッドとロウソクだけが合った。他に無駄なものは一切ない。タマキを縄で縛ったあと、カイムは彼の頬を数回引っばたき起こした。

タマキの目が徐々に開き、目の前にいるカイムを見た途端、大きくなった。右分けの髪。上等なスーツを着ているが身分不相応は明白だった。

「いやあ、どうも」

カイムはタマキに言った。

「な、なに、これはどういうことだ」

タマキは取り乱した。

「どうせタマキさんは死ぬから言うだけけど、僕は悪魔のカイム。詐欺師である人間としてあるまじき行為をしているあなたを裁きにきました」カイムはできるだけ丁寧な口調を心がけた。サザン曰く、`言葉使いは人となりを表す、だ。だから悪魔だって、とカイムは言い返したいが、いつも胸の奥深くに封じ込めている。

「悪魔あああ？」と不慣れな啖呵をタマキは切る。

「信じられないものを無理はないね」とカイムは言い、タマキの魂の出し入れを行った。魂というのは普通は白色なのだが、タマキのは黒く汚れていた。

「な、な、な、なんだこれは」

タマキは目の前の光景に驚愕の表情をした。それも無理はない。魂の出し入れは、身体エネルギーを支えている重要な役目を担っている。それが出し入れされれば身体が軽くなったり、元の身体の重みを繰り返す。

「これで信じてくれるとありがたい」

「詐欺師なんて他にもたくさんいるだろうが。なんで俺なんだ」

「なんで俺？っていう質問はおかしくない？だって遅かれ早かれタマキさんは僕に裁かれるんだから」

不適な笑みを効果的にカイムは示した。

ふざんけん、とタマキは息巻いていたが、「教えてよ」とカイムの一言で黙る。

「何を？」

「最近、タマキさんがだまし取った不動産会社の経営者のこと。騙しとったお金返して」

複数の会社を騙していたのだろう。タマキは視線を上に向け思案していた。そして、「ああ、あの運転資金に困っていた会社か。融資の話を持ちかけたら、ころっと騙されたよ。騙される方が悪い。人を信頼する方が悪い。この世はなんでも金で解決できるのさ」と言った。

「手口は？」

カイムは訊いた。

「まあ、この手法をやってる奴は多いからいいか。単純だ。ノンバンクの銀行で家を担保に六百万融資させる。それをこちらが用意した口座に振り込ませる。その口座には既に一三千万円入っている。それを合わせると三千六百万、その預金証書を担保にまた金を借りる。だが金は借りれない。なにせ偽だからね。その頃には六百万は俺の懐へ、っていう流れだ」

なるほど、おそらく話の大部分は省かれているだろうが、預金証書を担保にしてノンバンクの銀行一社ぐらいは信じさせるために金を借りれるよう細工をして、二社目で断られる、という、なかなかの手口だ。まあ、感心してる場合じゃないか、とカイムは思った。

カイムはタマキの胸元を探り、異物を感じた。それを取り出す。そこにはキャッシュ

カードが入っていた。

「暗証番号教える。もうお前に金は必要ない。必要としている人がいるんだ。それに、必死になって汗水流して、家族を養っている人間がいる」

そう言いながらカイムはフミカが脳裏をよぎった。笑うと八重歯がのぞく黒髪の少女。

「そんなわかってるわ。でもやる。俺は銀行で働いてたんだが、急にリストラにあってよ。それも理由が上司の不正を暴いたからだ。まあ、その暴いた証拠も握りつぶされたがな。銀行はクズの集まりだ。その銀行を利用して何が悪い」

「お前もそれなりの過去があったわけだ。むしろそれなりの頭脳があるのならもっと全うな形で役立てるべきだな」

カイムはそれ以上の無駄話をやめ、魂を喰った。非常に不味かった。不満が凝縮された味だった。誰もが心の中で満たされない思いを抱えている、それでも微かな希望を抱いて生活している。なぜ、人は邪なものに魅せられるのか。その答えはカイムにはまだ提示されていない。

タマキの縄を解き、ベッドに寝かしつけ、口元に口ウソクを一本咥えさせた。ライターで火を点け、部屋を暗くした。たしかに幻想的な光景だ。カイムは思う。タマキの顔が仄かに光、慈愛の温かみが彼の周囲を包んでいる。また人間に生まれ変わることがあったら、その頭脳を生かせる環境に身を置くことを期待したい。

そしてカイムは気づいた。キャッシュカードの暗証番号を聞き忘れたことを。まあ、いい。サザンがなんとかしてくれるはずだ。カイムは口ウソクの光を見つめながら、写真を一枚撮った。

一ヶ月後――

カイムはフミカの自宅前にいた。キャッシュカードの暗証番号はサザンに解明してもらった。口座には七億近いお金があり、三千万円をフミカの自宅に届けた。そこに一通の手紙を添えた。

フミカさんへ

あのときのお客です。お金は取り戻しました。またどこかで会う日まで。また家族が笑い合えることを願っています。

あのときのお客より

立派な一軒家から笑い声が聞こえる。どうやら犬もいるらしい。どうやら家族全員が庭へ出てきた。その中にフミカがいるのをカイムは確認した。そこには踏切で死にたい、と言った哀しみの表情はなかった。希望に包まれた明るい笑顔がそこにはあった。それにカイムに気づくことはない。既に新しい容姿に変わっているからだ。今回はチャラチャラした男という設定だ。どうもこういう男をカイムは好まない。

カイムはフミカの自宅から立ち去ろうと踵を返した。

が、「すみません」というフミカの声がした。「あのときの人ですよね」

その声にカイムは振り向かなかった。そうした方がいいと思ったからだ。なにせ俺は悪魔だ。関わってもろくなことがない。

「ありがとうございました」

というフミカの声が妙にカイムの心を穏やかにさせた。太ももから携帯のバイブの振動が伝わり角を曲がったところで耳にあてる。

「お別れはできたかい」

サザンの声が響いた。

「なんとか」

「悪魔に似つかわしくない所業だね」ヒヒヒと笑い、「で、新人をカイムちゃんの下につけるから。顔写真添付しとくね。じゃあ」と用件を述べて切った。

すぐに新人と思しき画像がカイムの携帯電話に送信された。それを見て彼は苦笑した。それはいつぞやか、悪魔、になりたい、と言っていた殺人マニアの老人だったからだ。名前は、メル、と可愛らしい名で、歯並びの良い笑顔が愛嬌を感じさせる。まあ、すぐに姿形は変わるだろうが。

やれやれ、悪魔になりたい、という変わり者も世の中にはいるようだ。それでも夢が叶ってよかったじゃないか、そう思い、カイムは携帯電話をポケットにしまった。